

みんなの元気が出るマガジンを作ろう

宮城県仙台市立吉成小学校

実施学年：6年

実施教科：総合的な学習の時間

生徒数：82人（3学級）

実施時間数：50時間



仮設住宅を見学。
手狭な建物の様子や花壇を
たくさん設置している様子
を知ることができた。



マガジンのレイアウト。
仮設住宅でくらしている人
に伝わるか、内容を検討中。



農業に思い入れの深い方々
を励まそうと、野菜の断面
図から絵と詩を創作。



制作した絵を届け、元気に
なってもらおうと仮設住宅
を再訪。

学習のねらい

- ・震災復興に関わっているさまざまな人と共に活動することによって、被災した人々の生活の様子を知り、被災者や復興に携わる人々の思いや考えに共感し、自分の考えを持てるようにする。
- ・復興に向けて頑張っている方の取り組みを伝えるために、マガジンづくりを通して表現の工夫を考えることができるようにする。

学習活動

1. 震災からの復興について調べよう
 - (1) 昨年度の活動や新聞スクラップ、復興情報誌をもとに話し合う。
 - (2) 仙台市復興事業局の柳谷さんの話を聞き復興の現状を知る。9/5（水）
2. マガジンづくりの計画を立てよう
 - (1) マガジン制作の見通しを持つ。
 - (2) マガジンの作り方をプロに教わる。9/18（火）
3. マガジンづくりの取材をしよう
 - (1) 震災復興の現場を訪ねる。
 - ①1組：荒井小用地仮設住宅「鶴亀会」取材9/26（水）
 - ②2組：堤町佐大ギャラリー 六連登り窯修復ボランティア体験と取材9/26（水）
 - ③3組：福田町仮設住宅「みんなの家」・せんだいメディアテークを取材9/24（月）
 - (2) 河北新報社編集局長の太田さんの話を聞く。10/3（水）
4. 取材したことを記事にしてみよう
 - (1) 1次原稿を作成する。
 - (2) 被災者（渋谷さん）の立場で原稿をチェックしてもらい、意見を聞く。10/31（水）
 - (3) 原稿修正の見通しと再取材の計画を立てる。
5. 再取材をしよう
 - (1) 南蒲生浄化センターの被害と生活への影響について聞く。11/21（水）
 - (2) 被災地を再取材～東六郷小学校・農家レストランもろや。11/26（月）
 ※課外 仙台子ども元気サミットで伊東豊雄さんにインタビュー。※課外 12/2（日）
6. 被災した方々を元気づけよう
 - (1) 荒浜の野菜を使って野菜の断面図を描く。12/4（火）
 - (2) デザインウィーク仙台で絵を飾る（せんだいメディアテーク）。※課外12/9（日）
 - (3) 「鶴亀会」・「みんなの家」に絵を贈る。※課外12/16（日）
 - (4) 佐大ギャラリーの登り窯に絵を飾る。※課外12/22（土）・23（日）
7. マガジンを完成させよう
 - (1) マガジンの修正原稿をつくる。
 - (2) 完成報告会に向けプレゼンを作成する。2/28（木）
 - (3) マガジン完成報告会を開く。3/5（火）
 ※課外「みんなの家」「鶴亀会」にマガジンを届ける。6の3：3/10（日）6の1：3/24（日）

準備品

- ・パソコン ・デジタルカメラ ・ビデオカメラ ・ワークシート ・プレゼンソフト
- ・荒浜で採れた野菜とクレヨンとマジック ・体操服 ・ipad

実施場所

- ・福田町南一丁目公園仮設住宅 ・せんだいメディアテーク ・荒井小用地仮設住宅
- ・堤町登り窯佐大商店 ・荒浜地区の畑

学習の流れ

場所・授業数	概要	活動の様子	反応
<p>学校</p> <p>5 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●震災からの復興について調べよう ・昨年度の活動や新聞スクラップ、復興情報誌をもとに話し合う。 ・復興の状況について仙台市復興事業局の方の話を聞く。 ・元気や頑張りを伝える「マガジン」制作を復興事業局の方に依頼される。 		<ul style="list-style-type: none"> ・プレハブ仮設、見なし仮設住宅などで暮らし、まだまだ困っている人がいることを知り驚いていた。 ・家のことだけではなく、人のつながり切れたことが大きな問題だとわかった。 ・人のつながりを意識した、自分たちにしかできないマガジンを作ろうという気持ちがふくらんだ。
<p>学校</p> <p>5 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●マガジンづくりの計画を立てよう ・実際のマガジンづくりにはどんな準備が必要か、マガジンづくりの見通しを話し合う。 ・マガジンの作り方を出版社の方に教わる ・教えられたことをもとに記事の内容や構成を考える。 ・取材の対象や個々の役割を決める 		<ul style="list-style-type: none"> ・被災した方を元気にするというテーマから離れないようにすることを強く意識できるようになった。 ・レイアウトを考え、何を取材するか考えなくてはいけなことに気づいた。 ・実際の取材に向けて、意欲を高めた。
<p>校外学習</p> <p>学校</p> <p>10 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●震災復興の現場をたずねよう ・1組：荒井小用地仮設住宅訪問 手仕事「福幸がえる」体験 ・2組：堤町佐大ギャラリー 6連の登り窯修復体験 ・3組：福田町仮設住宅訪問 伊東豊雄氏設計の「みんなの家」とメディアテーク見学 ●震災と復興に関する話を聞こう ・河北新報社編集局長太田さんの話を聞く 	 	<ul style="list-style-type: none"> ・プレハブ仮設住宅を見学し、狭さ、調理台のない不便さの中で暮らしていることがわかった。 ・「福幸がえる」と名付けられたストラップづくりが、農業に変わる手仕事だとわかった。 ・江戸時代から続く窯を修復し、これからの未来にもずっと残ってほしいと感じていた。 ・伊東豊雄さんが設計した「みんなの家」とメディアテークは人と空間を自由にする建築だと気づいた。

学習の流れ

場所・授業数	概要	活動の様子	反応
<p>学校</p> <p>12 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●取材したことを記事にしよう ・1次原稿を作成する。 ●初稿を見直そう ・被災者（渋谷さん）の立場で原稿をチェックしてもらい意見をいただく。 ・頂いた意見をもとに、原稿修正の見直し、再取材や被災者を励ます活動の計画を立てる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー記事ばかりで「励まし」になっていないことに気づいた。 ・体験が不足していることが「励まし」になっていない理由だと気づき、被災地、被災者の生活をもう一度自分たちの目で見たいという気持ちが高まった。また、自分たちができる「励まし方」を考えるようになった。 ・渋谷さんの話から、福田町や荒井の仮設住宅に住む人の多くが、震災前には農業を営んでいたことに気づいた。
<p>学校</p> <p>校外学習</p> <p>(課外)</p> <p>4 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●もう一度取材しよう ・南蒲生浄化センターの被害生活への影響やリユートでの慰問活動について鈴木さんの話を聞く。 ・昨年度の図書箱を贈る取り組みで関係を持った東六郷小学校を見学。 ・仙台白菜を作り、農家レストランを開いている方の畑を見学。 (・仙台子ども元気サミットで伊東豊雄さんにインタビュー。※課外) 		<ul style="list-style-type: none"> ・海岸近くで野菜づくりを再開した方の畑を見たことで、住宅だけでなく、大切にしていた農地や農業を失ったこと、暮らしと仕事の結びつきに改めて気づき、絵を描いて励まそうという気持ちが高まった。
<p>学校</p> <p>(課外活動)</p> <p>3 時間</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●被災した方々を元気づけよう ・荒浜地区の畑で採れた野菜を使って野菜の断面図をモチーフにした絵を描こう ・その絵からイメージした詩をつけてみよう (・仙台メディアテークでの野菜の断面図ワークショップに参加 ※課外) (・荒井小用地仮設住宅と福田町の仮設住宅を再訪し、絵を贈呈 ※課外) (・復活した登り窯の中をギャラリーにして飾る) 		<ul style="list-style-type: none"> ・野菜の断面図のおもしろさに気づき、描く部分を切り取ることでいろいろな形に見えることを楽しみながらデザインの基礎にふれた。 ・自分の作品ができ、イメージした詩をつけて被災した方に見てもらおうと考えた。 ・仮設住宅のみなさんに丁寧に一枚ずつ見てもらい、逆に元気づけられ、マガジンを早く完成させようと意気込んだ。

学習の流れ

場所・授業数	概要	活動の様子	反応
<p>学校</p> <p>11 時間</p>	<p>●マガジンを完成させよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の記事に追加した取材のことを加え、記事の書き方を再考する。 ・読んで元気を出してもらえるように構成の工夫を考える。 ・マガジンの原稿を完成させ、印刷業者に入稿する。 ・完成報告会に向けてプレゼンを作成する。 ・完成報告会の準備をする。 ・マガジン完成報告会を開き、仙台市復興事業局やお世話になった方に報告する。 ・プロジェクト全体の振り返りをする。 		<ul style="list-style-type: none"> ・絵を見ていただいたことで、記事の主語が自分たちになり、説得力や元気づける意欲が感じ取られるようになった。 ・手書きの部分を入れることで、子どもが作るマガジンだとアピールした。 ・子どもたちなりにプレゼンを組み立て、考えたことや思いを伝えようとした。 ・震災によって、家だけでなく仕事も失い、沈みがちな人々を、今回のマガジン制作によって、多少なりとも励ますことができたという実感を持つことができ、自分たちが進めてきた学習の意義を感じると共に、今ある自分たちの生活の大切さにも気づくことができた。
<p>(課外活動)</p>	<p>(●マガジンを届け元気にしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みんなの家」にマガジンを届ける。 ・「鶴亀会」にマガジンを届ける。 		<ul style="list-style-type: none"> ・これまでにたくさんの方に協力していただいたこと、そしてマガジンが届くのを楽しみにしている方がたくさんいることを感じた。

生徒の作品



先生の声

実施に当たり工夫した点 苦労した点

- 実際に被災された方がいらっしゃる NPO: 建築と子供たちネットワーク仙台と共に活動を進めたことで、マガジン制作に「建築」や「デザイン」の視点を持ち込むことができたし、何が励みとなるのか子どもたちは本気になって考えることができた。
- せんだいメディアテークや仮設住宅では、現地で2時間程しか取材できる時間が取れなかったため、取材が足りない部分はDVDやインターネット等の資料を活用したが、それでも分からない部分はあった。そのため、実際に子どもたちが設計した方に話を聞く機会を設けた。設計者本人に確かめることで、子どもたちは自信を持ってマガジンの記事制作に取り組めるようになった。

児童・生徒の反応

- 初稿を仕上げた上で、インタビューだけではマガジンにはならないことに気づいた。実際に焼き窯の補修やシジミ貝を使ったアクセサリーづくり、建築関係のサミットへの参加、そして野菜の断面図を描くなどの「体験活動」を加えることで、マガジンの記事におもしろさが出てきた。多くの人と関わることによって、復興について自分なりの考えを持てるようになったためであろう。
- 人が暮らすと言うことを、住宅だけでなく、仕事や近隣の人との結びつきまで含めて考えなければならぬことに気づいた。
- 伊東豊雄氏の建築のコンセプトに「人を自由にする」がある。その工夫がどこに現れているのか、仙台メディアテークと「みんなの家」の共通点から考え、子どもたちなりに「いろいろな人が気軽に入れる」「そのために仕切りが無い」「だから自由な姿勢がとれる」ことに気づいた。また、そのことを伊東氏に確認しようと、クラスの代表者がプレゼンを持って伊東氏にインタビューを申し込み、話を聞いてきた。このような場面で子どもが探究的に活動を進めている姿があった。
- マガジン制作後、児童らは「人とのつながりが増えてうれしい」「体験した記憶を大事にしたい」「自分たちの考えた励ましで元気になった人がいる」等の感想を持った。また、これまでにお世話になったたくさんの方に感謝の気持ちを持って招待状を書き、報告会を開くことができた。

教師の変化 (担当、担当外を含めて)

- マガジン制作について見通しが持てなかった部分をNPOや印刷社にサポートしていただき、活動の段取りなどを共に話し合いながら進めることができた。また、その中でその方達が持っている人材ネットワークを活用できたことは大きい。今回生まれた人とのつながりを大切にしていきたい。